

「新潟の教育情報」創刊号の発刊に当たって

にいがた県民教育研究所設立準備会代表 長崎 明

「ふれあい」とは有難いものです。そして、暖かいものです。思い起こせば今から四年前、一七九九年九月、国際児童年の諸行事の一環として、本県でも「新潟の子どもの現実と教育・環境を語る」というテーマで新潟シンポジウムが開かれました。それまで、お互い顔を合わせたこともなかった保育園・幼稚園・小学・中学・高校・大学の各教師や医師・弁護士・父母といった人びとが百人余りも一堂に会し、熱のこもった報告・討論がもたれました。せっかくなので「ふれあい」をみんなで大切にしたい、そうした共感に支えられて、とりあえず「新潟教育懇談会」を結成し、一九八一年六月「今、教育の現場で」という報告集を新潟日報事業社から発行することができました。

その頃から既に、子どもの体力の低下、虚弱化が憂慮され、生活の乱れや受験目標だけの学習が及ぼす心身の跛行的発達が指摘されました。その後から今日までの二年間、これらに加えて非行・暴力が目立ちはじめ、次第に低年合化の兆候を見せはじめています。

何故でしょうか。父母・教師の無気力な受け止め方に問題があるとか、学歴社会のエスカレーターに乗り遅れまいとする受験体制に問題があるとか、経済大国・軍事大国を目指す大人の社会の動向に問題があるとか、いろいろな指摘がなされていますが、それらの論議は何かよその国から論評している感じで、もう一步「これだ」という点に欠ける気がします。

考えてみると、今日の教育論議は、おっそろしく高邁な政治的もしくは第三者的・抽象的レベルに進められるか、逆に、おっそろしく身近な井戸端のもしくは主観的・現実的レベルで話題にされるかであって、その中間項が欠けているのではないのでしょうか。つまり、新潟とか、越後とかといわれる歴史的・地理的風土の中で培われてきた地域性に根ざす観点が、ひとつ足りないように思われます。例えば、バスや汽車の中でお行儀の悪い子どもをたしなめるのに新潟のお母さんは必ずといってよいほど、「運転手さんに叱られるよ」とか、「車

掌さんがくるよ」とか、「おまわりさんにいつけるよ」といった調子で、何らかの権威に頼ってでないと子どもにいきかせることができないようです。

そのことで「他の人の迷惑になるからいけない」とか、「子どもはがまんして立っていることが心身の鍛錬になる」といったしつけ方はまず見たことがありません。これは新潟特有の傾向とばかりいいたければいいかもしれませんが、権威に弱く、長いものには巻かれる式の越後人気質がその傾向に輪をかけているのは確かでしょう。いまだに、あの先生は〇〇闊だとか、△△会だとかいったセクト主義が根強く残っていたり、教育が派閥力学や政治力学の場にされやすい体質を持っているのも本県の特徴の一つかも知れません。また、本県がわが国第一の農業県であるだけに、広い農村部や過疎地と、近年とみに発展した都市部やその近郊との間の地域間格差（落差）の大きさが、本県の生活環境ひいては子どもの教育・学習環境に微妙な影を落としているのかも知れません。

全国レベルもしくは都市レベルだけの理論解析でも、実践報告でもなく、新潟県じしんの自前の「理論と実践」を積み上げ、蓄積していくことが今こそ必要であり、また可能であると、私たちは判断しています。しかし、この大望を果たすには、今すぐに役立つ人と金と時間が必要に不足しています。

独自の研究所を持ちたいとの熱意に燃える同志の人びと、研究スタッフとして充分な能力を備えた人びとの結果は今すぐにでも可能と思われれます。そして、時間の浪費を避けるためには明日にでも研究所を発足させたいのですが、残念ながら資金集めのために若干の準備期間を置かねばなりません。でも、私たちは「歩きつつ、明日に備える道」を選びました。すなわち、準備期間といえども腕をこまねいているのではなくて、研究会活動、機関誌活動、情報宣伝活動を開始することにしました。

この「新潟の教育情報」は、こうした経過を経て発行することになったのです。読者各位の熱烈なご支援、ご協力をお願いいたします。

（新潟大学教務